Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-18

ヘルマン・ヘッセ『東方巡礼』における〈東方〉と結社

大杉，奈穂

(Citation)
DA,10:18-30

(Issue Date)
2014

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81008754

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008754

KOBE UNIVERSITY

ヘルマン・ヘッセ『東方巡礼』における〈東方〉と結社

大杉奈穂

はじめに

ヘルマン・ヘッセ（Hermann Hesse, 1877-1962）の『東方巡礼』（*Die Morgenlandfahrt*, 1932）は、1929年から1931年にかけて書かれた作品である。主人公H.H.は結社に入団し、仲間と共に〈東方〉を目指して巡礼する。彼らは時には時空間を越えて中世や黄金時代を旅し、また、道中ドン・キホーテやパルツィファルといった文学作品の登場人物に出会う。このような作品の内容に対して、当時の読者は少なからず当惑を示しており、ヘッセ自身も読者が本作品を「引きこもった人間による隠者の戯れ」[1]と感じるであろうことを認識していた。また、本作品に対して厳しい評価を下した後の研究者もいた。[2]

このような原因の一つとして、本作品の大部分がヘッセ個人と結び付けられる事柄を基に書かれており、作品が書かれた時代との関連性が希薄であると見なし得ることが挙げられるだろう。

しかし、ヘッセは『デミアン』（*Demian*, 1919）以降、自身の作品の中で時代の問題に取り組み、彼なりの解決策を提示してきた。それゆえ、本作品がいかに執筆当時の時代と関連を持たないように見えても、ヘッセが感じとっていた時代の問題が隠されていると考えられる。先行研究においては、時代と自己との乖離が進む中で、ヘッセが精神的共同体を希求したことが指摘されている。[3] しかし、そのような考えに至った経緯は充分には説明されておらず、また、ヘッセの提示した解決策が実際の読者にどのように捉えられるか、ということを考察するに至っていない。そこで、本論では主人公の歩みを追っていくことによって、ヘッセが考えていた時代の問題、および彼なりの解決策を明らかにしたうえで、それが妥当であるかを検討する。

そうした考察を準備するため、まずは本作品における〈東方〉について考察する。というのは、本作品の理解のためには、結社が向かう先である〈東方〉という言葉は何に由来するのか、そしてそこは何を意味しているかを明らかにしなければならないからである。この〈東方〉には、先行研究においても指摘されているように、東南アジア旅行、老子の思想およびインド思想といった、ヘッセが実際に体験したり取り組んだりした東洋と関連

---

[1] Hermann Hesse: *Zu »Die Morgenlandfahrt«*. In: ders.: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Hrsg. von Volker Michels, Bd. 12, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2003, S. 223-225, hier S. 224.

[2] 例えばハインツ・シュトルテは本作品に関して、「本作品は最も不出来な作品とは言わないまでも、最も不出来な作品のうちの一つであるに違いない」と述べている。 Heinz Stolte: *Hermann Hesse : Weltscheu und Lebensliebe*. Hamburg: Hansa, 1971, S. 227.

[3] Vgl. Joseph Mileck: *Hermann Hesse: Dichter, Sucher, Bekenner. Biographie.* Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1979, S. 256. 石橋邦俊「転換点としての『東方巡礼』」、九州大学編『文学研究』第85号（1988）所収、67-97頁、91頁参照。

している。[4] しかし、その両側面から〈東方〉を考察したものが存在しないため、本論ではじめに『東方巡礼』と東南アジア旅行の体験および上で挙げた思想との関連について考察する。

1. 〈東方〉の誕生

1.1. 東南アジア旅行

作中の Morgenland、Orient という言葉や「子どもの十字軍」[5]といった表現は中世の中東を思い起こさせる。しかし、〈東方〉および結社の描写を詳細に見ていくと、本作品にはヘッセが 1911 年に行った東南アジア旅行の体験が反映されていることが読み取れる。[6] 主人公 H.H.の属する結社は、「東方へと、光の故郷へと」[7]行進するが、そのような結社の運動は「魂の流れの一つの波、東方へ、故郷へと帰ろうとする精神の永遠の努力の中の一つの波」[8]であった。このように、〈東方〉は本作品中でしばしば「故郷（Heimat）」と表現されている。ヘッセは『アジアの思い出』（*Erinnerungen an Asien*, 1914）で旅行の体験を振り返り、「私は人類の原故郷（Urheimat des Menschen）についての最新の理論を知らないが、私にとって、少なくとも、象徴的には、熱帯のジャングルが生命の故郷（Heimat des Lebens）であり、日光と湿った大地から命ある形が調合される単純で原始的なるつぼなのだ」[9]と記している。インドを舞台にした小説『ローベルト・アギオン』（*Robert Aghion*, 1912）から読み取れるように、旅行直後は現実のアジアへの失望が色濃かったが、時を経るにつれ、アジアに関する思い出の核心部だけが残り、ヘッセの見た東南アジアはあらゆるものが生まれ出た場所、そしていつかはそこに帰る場所を意味するようになる。

旅の第一歩を踏み出した H.H.の属するグループは「まもなく他のグループと合流し、一

---

[4] 『東方巡礼』と東南アジア旅行との関連については、重竹芳江「ヘッセにおける東洋ならざる東洋—『シンガポールの夢』と『東方巡礼』」、九州大学独文学会編『九州ドイツ文学』第 16 号（2002）所収、29-41 頁を参照。また老荘思想との関連については、 Adrian Hsia: *Hermann Hesse und China : Darstellung, Materialien, und Interpretation*. Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1974, S. 262-272 が詳しい。

[5] Hermann Hesse: *Die Morgenlandfahrt*. In: ders.: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Hrsg. von Volker Michels, Bd. 4, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2001, S. 535-590, hier S. 559. 以下この作品からの引用は、*Die Morgenlandfahrt* と略記する。なお、訳は日本ヘルマン・ヘッセ友の会・研究会編『ヘルマン・ヘッセ全集』第 13 巻、臨川書店、2006 年を参考にした。

[6] 重竹芳江もまた本作品と東南アジア旅行との関連を指摘している。重竹は、旅行記『インドから』（*Aus Indien*, 1913）に収められている、ヘッセが旅行中に見た夢の内容を記した『シンガポールの夢』（*Singapur-Traum*, 1911）の中に『東方巡礼』に似たような表現やモチーフが見られると指摘する。例えば、『シンガポールの夢』で描写される思いがけない人々との非現実的な出会いは、『東方巡礼』における過去の著名人や文学作品の登場人物との出会いを想起させるという。重竹、前掲書、32 頁。

[7] *Die Morgenlandfahrt*, S. 540.

[8] Ebd., S. 540.

[9] Hermann Hesse: *Erinnerungen an Asien*. In: ders.: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Hrsg. von Volker Michels, Bd. 13, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2003, S. 351-354, hier S. 353.

体感や共通の目的に向かっているという感情に満たされ、幸福を感じ」[10]る。心に個人的な夢を抱いてはいるが、ある秘密の共通目標を持っている彼らは、時間と空間を自由に行き来することができ、「魔法の輪に取り囲まれ」[11]ている。ここで、再びヘッセの東南アジア旅行の体験に目を向けると、ヘッセは旅行中、現地で暮らす人々に感銘を受けた。例えば中国人に関して彼は以下のように述べている。

> 最初の、そして恐らくは最も強い外見的な印象、それは中国人である。〔...〕どのようにして多数の人間が人種や信仰、精神的な類似性、生活の同一性などによって、ちょうど蜂蜜の一匹一匹が蜂蜜の国で暮らすように、各個人がただ制約され細胞として一緒に暮らすひとかたまりの身体になるのか、そのことを私はまだ一度も本当に経験したことがなかった。[12]

また、『インドから』(*Aus Indien*, 1913) では、現地で見たヒンドゥー教徒、イスラム教徒、仏教徒に関して以下のように述べている。

> 裕福な都会の家主から最下層のクーリーやパリアに至るまで、誰もが宗教を持っている。彼らの宗教は粗末で下品なものであり、表面的で粗雑であったが、それは太陽や空気のように重要な位置を占めていて、あらゆるところにある。それは命の流れであり、魔術的な雰囲気を醸し出すものであって、私たちがこのまずしく虐げられた人々を本当にうらやむことができる唯一の点である。われわれ北ヨーロッパの人間が置かれている理知的で個人主義的な文化では、ほんのときたま、例えばバッハの音楽を聴く時くらいしか、理想社会への帰属感や無尽蔵の魔術的な源泉から湧きあがる力というような忘我の陶酔を感じることはないが、世界の片隅で夕方になると跪いて祈りを捧げるイスラム教徒にはそれがあるし、仏教徒も寺院の涼しい入口のホールで毎日それを手にしているのである。[13]

このように、多数の人間が信仰や精神的類似性によっていわば一つの組織を構成している点や、信仰に根ざして生きることによって魔術的な雰囲気に満たされている点において、ヘッセが東南アジアで見た人々と〈東方〉を目指す巡礼者は近しい存在である。作中で、カイザーリンクやオセンドフスキーといった実在の人物の東南アジア旅行と結社の〈東方〉への巡礼は何の関係もないとされているが[14]、『東方巡礼』における〈東方〉および結社の

---

[10] *Die Morgenlandfahrt*, S. 545.
[11] Ebd., S. 548.
[12] Hermann Hesse: *Erinnerungen an Asien*. In: ders.: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Hrsg. von Volker Michels, Bd. 13, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2003, S. 351-354, hier S. 357.
[13] Hermann Hesse: *Aus Indien*. In: ders.: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Hrsg. von Volker Michels, Bd. 13, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2003, S. 208-283, hier S. 283.
[14] *Die Morgenladfahrt*, S. 535f.

人々は、このように作者の東南アジア像、またそこで暮らす人々にその根源を持つと言えよう。ヘッセは1911年の旅行以降、再びヨーロッパから出て東に向かうことはなかった。しかし「彼個人の東洋という理想に再び到達するために」[15]、本作品の結社の人々が実際にはイタリア、スイスといったヨーロッパを中心に巡礼するにも関わらず、結社の向かう場所を〈東方〉と名付けたのではないだろうか。本作品で用いられるPilgerという言葉はラテン語のperegrinusに由来し、市民権をもつ地域の外で暮らすよそ者を意味する。[16] したがって、本来巡礼とは異国へと向かうものであるが、本作品の東方巡礼者はまだ見たことのない故郷へと向かっていると言える。〈東方〉は西洋の人間からすれば、異郷である。しかし、ヘッセはその場所に故郷という意味を付与して、それをこの作品の中心テーマとした。

1.2. 老子の思想およびインド思想

ヘッセは実際のアジアを旅行したが、同時に老子の思想やインド思想にも取り組んだ。それらはしばしば彼の作品の内容・思想面に影響を与えたり、あるいは作品中の小道具として用いられたりした。[17] 本作品にも、老子の思想とインド思想との関連性が見られる。結社に採用されるためには、各人は個人的な旅の目標を持たなければならないのだが、ある仲間は、「タオ（Tao）と呼ぶ高貴な宝を獲得すること」[18]を目標としていた。また、違う仲間は「クンダリーニと呼ばれるある種の蛇を捕まえようと固く決心していた」。[19] タオ、クンダリーニはともに対立物の統一を象徴する存在である。[20] 統一という点に着目すると、実際、本作品においては様々な対立物が解消されていることが分かる。

ヨーゼフ・ミレックは、本作品はヘッセ自身の1919年から1931年までの生活を昇華したものであり、巡礼の道程とブレームガルテンでの祝祭は、ヘッセが1923年から1929年

---

[15] Ralph Freedman: *Hermann Hesse, Autor der Krisis.Eine Biographie*. Frankfut am Main: Suhrkamp, 1982, S. 430.

[16] ノルベルト・オーラー『巡礼の文化史』井本晌一、藤代幸一訳、法政大学出版局、2004年、iii頁。

[17] 例えば、『シッダールタ』（*Siddhartha*, 1922）はインドが舞台であるが、その作品からはヘッセが1910年代から集中的に取り組んだ老子の思想の影響が読み取れる。『シッダールタ』と老子の思想との関連については、大杉奈穂「ヘルマン・ヘッセ『シッダールタ』における老子の思想—自己改革と普遍的愛への道のり—」、神戸大学ドイツ文学会編『DA』第9号（2013）所収、3-19頁参照。また、『荒野の狼』（*Der Steppenwolf*, 1927）の主人公ハリー・ハラーはインド神話およびインド思想に造詣が深い人物という設定である。例えば、主人公が「あらゆる力と業が偏在することは昔のインド人はたいそう良く知っていた」と述べる場面がある。Hermann Hesse: *Der Steppenwolf*. In: ders.: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Hrsg. von Volker Michels, Bd. 4, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2003, S. 5-267, hier S. 102.

[18] *Die Morgenlandfahrt*, S. 538.

[19] Ebd.

[20] タオとは、絶対的な世界の真実を表す道家思想の最高概念であり、善悪といった対立を統一する存在である。クンダリーニとは、タントラ教に由来する各人が内面に有しているエネルギーであり、女性性と男性性の統一を意味する。アジット・ムケルジー『タントラ　東洋の知恵』松長有慶訳、新潮社、1981年、78-80頁参照。

にかけて行った南ドイツでの朗読旅行と、チューリヒ、ヴィンタートゥール、ベルンの友人の家でのパーティーを反映していると述べている。[21] 作中、例えばシュパイヒェンドルフといった架空の町が登場するが、それはトゥットリンゲンにあるシュパイヒンゲンという実在の場所がモデルとなっているとされる。[22] また、作中にはさまざまな文学作品やヘッセ自身の作品の登場人物のみならず、ヘッセの友人も数多く登場する。ヘッセは本作品を「メールヒェン」[23]と呼んでいたが、それはほとんど彼自身の現実生活を基にしており、現実と文学およびメールヒェンとの境界、すなわち現実と空想の境界の消滅を試みていると思われる。

ブレームガルテンでは、ヘッセの友人だけでなく、数多くの文学作品の登場人物も結社の祝祭に参加する。ヘッセの『荒野の狼』のパブロは無邪気さと生きる喜びに満ちて笛を手に座り、ホフマンの『黄金の壺』の文書係リントホルストは龍の真似をして、荒々しく鼻から火を吹く。H.H.は、これらの創造された人物のほうが作家よりも生気に満ちていることに気付く。作家はある人物を創造し、その人物を動かし、いわば支配するが、ここでは創造された人物は作家の支配をもはや受けておらず、支配と被支配の関係は存在しない。また、結社の仲間のみならず動物からも好かれる従者レーオは、第五章で結社の頂点に立つ者であることが判明する。彼は仕える者（der Diener）であると同時に最高位者（der Oberste）でもある。レーオという人物の中においても支配と被支配という対立は消滅されている。

このように、本作品では現実と空想、支配と被支配という対立物の境界が克服されている。ヘッセはインド思想や中国古典思想から、対立物は存在しないという考えを吸収し、そのような考えはヘッセの生活面や、また文学作品を書く上でも重要なものとなった。ヘッセにとって、東洋は対立物のない世界、すなわち彼がしばしば用いたように「統一（Einheit）」の世界を意味していた。[24] 本作品には、そのようなヘッセの理想であった統一

---

[21] Mileck, a. a. O., S. 241f., 246.
[22] Ebd.
[23] Hermann Hesse: *Gesammelte Briefe in 4 Bänden*. Hrsg. von Ursula und Volker Michels, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1977, Bd. 2, S. 299, Brief vom 24. 11. 1931 an seinen Neffen Carlo Isenberg. 以下、この書簡集は *Gesammelte Briefe* と略記する。
[24] ヘッセは対立物のない状態をしばしば「統一（Einheit）」と呼んだ。それは『ロマン主義の精神』（*Geist der Romantik*, 1926）において、「周知のように、古い東洋の教えや宗教の一部は統一という太古の思想を基礎となしている」とあるように東洋から着想を得たものと言える。『幸福』（*Glück*, 1949）には、「意味（SINN）こそ多様なものの統一である」と書かれている。『道徳経』の翻訳者リヒャルト・ヴィルヘルムはタオをしばしば「意味（SINN）」と訳しているため、ここの「意味」とはタオを指していると言える。また、『蝶について』（*Über Schmetterlinge*, 1935）には「私は〔...〕私が感嘆し、生きた世界として体験するあらゆるものの兄弟に、つまり蝶、カブトムシ、雲、川、山の兄弟になる。というのは、私は驚きの道の途上で一瞬のあいだ分離の世界から逃れ去り、統一の世界へ入ったからである。そこでは物も生き物も、他に向かって「それは汝なり（Das bist du）」と言うのだ」と書かれている。「それは汝なり」はヴェーダンタ哲学の金言"tat twam asi"を意味する。したがって、ヘッセの「統一」には老子とインド思想両方からの影響がうかがえる。

の世界が反映されている。

1.3. テクスチュアルな東洋

作中、〈東方〉は「故郷」とだけでなく「メールヒェンの国」とも表現され、また、その世界は「魔法」や「魔術的な要素」だけでなく「ポエジー」にも満ちているとされる。故郷や魔法および魔術的な要素に関しては先に考察したが、ここでは「メールヒェンの国」や「ポエジー」が何に由来するのか見ていきたい。

主人公 H.H.は、ノヴァーリスの『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』(*Heinrich von Ofterdingen*, 1802) にある「わたしたちはいったいどこへ向かっているのか？　つねに故郷へ」[25]という言葉を好いている。その作品において、旅先で出会ったアラビア出身の若い女性ツーリマが主人公ハインリヒに身の上話をする場面で、「故郷の人々や祖国のことが、言葉を尽くして讃えられた。かの地の人々の高潔な心、生活にみなぎるポエジー（Poesie des Lebens）と自然のもつ不思議な神秘に満ちた優美さに対する澄みきった強烈な感受性などがつぶさに語られ、豊饒なアラビアのあちこちのロマン主義的な美しい土地が描写された」[26]と語られる。また、詩人クリングゾルが主人公に「ポエジーの国であるロマン主義的な東方（das Land der Poesie, das romantische Morgenland）は甘美な憂愁をたたえて君にあいさつをおくった」[27]と述べる場面がある。ヘッセはノヴァーリスを称賛しており、[28] このような彼の東洋観を受け継いだことは想像に難くない。

また、H.H.は『千夜一夜物語』の読者であったが、ヘッセ自身も幼少期から東洋の物語とメールヒェンに魅了されていた。[29] ヘッセは『千夜一夜物語』について「東洋のその後の作品で我々に欠かせないのは、大部のおとぎ話集『千夜一夜物語』である。これは尽きることのない喜びの源泉であり、世界で最も豊かな絵本である」[30]と述べている。この文章から、東洋はヘッセにとって空想をかきたてる場であったことがうかがえる。このようなノヴァーリスの東洋観、空想の場としての東洋というイメージは、ヘッセの内面化された東南アジア像と一体となり、それは本作品において〈東方〉と名付けられる。〈東方〉は確かに東南アジアや中東のイメージおよび東洋の思想を基に創造されたが、そこはもはや地理的に特定できるある国を指しているのではなく、各人が内面に有している創造的な部分を

---

[25] Novalis: *Heinrich von Ofterdingen*. In: ders.: *Schriften in 6 Bänden*. Hrsg. von Paul Kluckhohn, Richard Samuel, Bd. 1, Stuttgart: W. Kohlhammer, S. 325.
[26] Ebd., S. 236.
[27] Ebd., S. 283.
[28] Vgl. Hermann Hesse: *Romantik und Neuromantik*. In: ders.: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Hrsg. von Volker Michels, Bd. 14, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2003, S. 283-290. Hermann Hesse: *Novalis. Dokumente seines Lebens und Sterbens*. In: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Hrsg. von Volker Michels, Bd. 18, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2002, S. 541-543.
[29] Vgl. Hermann Hesse: »*Tausend und ein Tag*« In: ders.: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Hrsg. von Volker Michels, Bd. 16, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2002, S. 388,389, hier S. 388.
[30] Hermann Hesse: *Eine Bibliothek der Weltliteratur*. In: ders.: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Hrsg. von Volker Michels, Bd. 14, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2003, S. 395-425, hier S. 419.

意味している。また、同時に「魂の故郷」[31]、つまり立ち帰るべき場所をも意味している。そこを目指す者たちは日常で見られるような対立の概念にはもはやとらわれていないのである。

2. H.H.の歩み

2.1. 結社への受け入れ

次に、主人公 H.H.の歩みを結社との関連から考察する。第一章において、主人公 H.H.は結社への採用が認められる。この結社へは誰でも入団できるわけではなく、ある条件を満たさなければならない。その条件とは、個人的な旅の目的を持つことである。そのことは、「僕たち各人は共通の理想や目標に従い、共同の旗印のもとで戦っているように見えたが、もっとも内奥の力と最後の慰めとして、それぞれ独自のたわいない子供の夢を心に抱いていた」[32]と H.H.が述べるように、具体的に言うと各人が夢を持つことである。主人公は『千夜一夜物語』のファティマ姫に会い、可能であれば彼女から愛を得る、という夢を心に抱き、結社の幹部にそれを打ち明ける。結社は彼を受け入れ、代弁者は主人公に対し、「信仰に忠実であるように、危機にあっては勇敢であるように、兄弟愛につとめるようにと忠告」[33]する。この代弁者の言葉は、結社に対して忠実であるだけでなく、非現実的と言える各人の夢や〈東方〉、すなわち人間の創造的な部分を信じ続けることをも意味すると考えられる。そうすることによって、「結社の兄弟が自動車も船も使わずに世界中を旅してまわったように、また戦争で根底から揺るがされた世界を信仰によって克服し、楽園に変えたように」[34]、そして H.H.が「世界と地獄に対して〔…〕不死身になり、騎士や十字軍の戦士になる」ことができたように、戦後という混乱の時代においてもその現状に屈せず、現実世界の諸問題に立ち向かうことができるからである。[35]

ヘッセは『『東方巡礼』について』(*Zu »Die Morgenlandfahrt«,* 1932) で、「人は、宗教や哲学や芸術の時間を超越したこうした世界から、現代の問題へ、また実践的で政治的な問題へ戻っていくが、それは、弱められてではなく鍛えられて、すなわち忍耐力で、ユーモアで、理解への新たな意欲で、生きている者やその苦悩や思い違いへの新たな愛で武装して戻っていくのである」[36]と記している。このように、彼は形而上学的な事柄に取り組むことにより、現実で起きている諸問題に対処できると確信していたが、そのような考えは〈東方〉へと向かう結社の人々に反映されている。本作品がメールヒェンであるにも関わらず、第一次世界大戦後という明確な時代設定を持っているのは、困難な時代に生きる人々へ文学の持つ可能性を提示しようとしたからであると考えられる。

---

[31] *Die Morgenladfahrt*, S. 547.
[32] *Die Morgenlandfahrt*, S. 538.
[33] Ebd., S. 539.
[34] Ebd., S. 547.
[35] 重竹、前掲書、35 頁参照。
[36] Hermann Hesse: *Zu »Die Morgenlandfahrt«*. In ders.: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Hrsg. von Volker Michels.Bd. 12, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2003, S. 223-225, hier S. 224.

2.2. 結社からの離脱

第二章において、モルビオ・インフェリオーレでの従者レーオの失踪を契機に結社は団結力を失い、崩壊へと向かう。主人公は「僕たちの仲間、僕たちの誓い、僕たちの東方への旅、僕たちの全人生、そのすべてが価値と意味を失いそうだった」[37]と、事態の深刻さを明らかにする。この場面は第一章終盤で描かれたブレームガルテンでの祝祭の華やかさと対照的である。このことは、各人の創造的な部分、内面世界への信念がたやすく揺さぶられることを暗示していると考えられる。ヘッセは1926年、次のような手紙を書いている。

> 私たちの文化はもはや存在しないのです。ヨーロッパが今日営んでいる実に悪魔的でほとんど耐えがたい生、この完全に非精神的な、非芸術的な、放縦な、無秩序な、機械的な生は、私の見解では、もうあまり長くは続かない状況なのです。私たち繊細な人間は、今日すでにそのことで破滅しているのです。首をくくるか、アルコールをがぶ飲みして死ぬか、凍りついた孤独に沈み込むかです。[38]

このように、当時のヨーロッパ社会において、「繊細な人間」、すなわち作家が困難な状況にあることが示唆されている。また、1932年に書いた手紙では、再度の戦争の心配は無用だとする女性の話を持ち出し、状況が1914年と同じであると記した後、以下のように述べる。

> もし私個人の私生活の中で似たようなことが起こっていないのであれば、これを笑ってすませることもできるでしょう。でもとうに解決され克服されたと思われていた状況と問題が繰り返されているのです。確かに人々は少々うんざりして我慢強くなってきてはいますが、やはり多くは学ばなかったのです。どうやら人間には、教訓を学び取るという能力はさほどないようです。人生を文学や思想に捧げてきた人間にとっては、これは惨めな結末です。[39]

手紙から読者に対するヘッセの失望感が読み取れる。このような手紙の内容を考慮すると、本作品における結社の崩壊は、当時のヨーロッパ社会では、内面世界、創造性を信じ続けることは困難で、そちら側の世界にいる詩人でさえその世界にとどまり続けることが困難になっていることを示唆していると思われる。『デミアン』以降ヘッセは、時代の問題に取り組み、それに対する回答を自身の作品の中で提示しようという創作姿勢を取り続けた。しかし、ヘッセが期待していたような「教訓を学び取る」読者は実際にはわずかしか存在せず、失望せざるを得なかった。文学を通して読者に働きかけようと試みる一方で、自身の意図が読者には伝わらないという失望感や文学への信念の喪失をヘッセが感じてい

---

[37] *Die Morgenlandfahrt*, S. 553.
[38] *Gesammelte Briefe*, Bd. 2, S. 148, Brief von 1922 an die Redaktion des »Ostwart-Jahrbuchs«, Bresrau.
[39] Ebd., Bd. 2, S. 349, Brief vom Oktober1932 an Alice Reutholt.

たことが第一章と第二章において浮き彫りにされる。

2.3. 結社への再加入

第三章および第四章では、結社から脱走した後の主人公の生活が描かれる。元々ヴァイオリン奏者であった主人公はヴァイオリンを売り払ってしまい、完全に芸術から切り離され、現実の第一次世界大戦後のヨーロッパに暮らしている。「失敗に終わった東方への旅からたった一人で帰還して以来、いっそう価値も勇気も失った期待外れの人生のあらゆる不愉快さが、自分自身と自分の能力に対する一切の不信が、かつて体験したあの良き偉大なる時代への妬ましく、後悔を伴った憧れの一切が、痛みとして僕の中で成長していた」[40]、と述べる彼は、かつて脱走した結社の仲間と同様、現実のヨーロッパにおいて人生に意義を見出せずにいる。第五章で、主人公が結社に呼び出され、結社の書庫を閲覧するのを許された際、彼はかつて追い求めたファティマ姫について調べる。ファティマ姫の情報のある書庫には小さなメダルがあり、その中には彼女の肖像が描かれていた。そして彼は自身が結社に属していた頃を思い出す。

> 一瞬、千夜一夜物語を、少年時代に読んだすべてのメールヒェンを、またファティマのもとへ、オリエントへと赴くために、見習い期間を終えて、結社に採用されたいと志願したあの大いなる頃の夢と願いのすべてを思い出した。そのメダルは、蜘蛛の糸のように繊細なすみれ色の絹の布に包まれていた。その香りをかいでみると、言葉にならないほど遠く、ほのかな夢のように、王女と東方の香りがした。この遠いかすかな魔法の香りを吸い込むと、突然、激しい思いに襲われた。あの頃はなんという優しい魔法に包まれて東方巡礼に踏み出したことか、いかにしてその巡礼が邪悪な、結局は未知なる障害にあって失敗したことか、その後、あの魔法が消えてしまって、それ以来僕の呼吸する空気や食べ物や飲み物がなんという殺伐としたものに、無味乾燥なものに、不毛な絶望になったことか！〔...〕ああ、今では、世界と地獄に対して僕が不死身になり、騎士や十字軍の戦士になるには、あのアラビアの王女の肖像だけではもはや充分ではないのだろう。[41]

H.H.の心情の変化には、内にある創造的な部分を信じる結社にいた頃は現実世界の問題に対処することができたが、理性や科学技術に支配されたヨーロッパに身を置くようになってからは、「絶望的で愚かな生活、頑迷で自殺するに等しい生活」[42]を送ることしかできず、生の意義を見出せなくなったというヘッセの主張が込められている。このことは、単なる夢や内面世界への憧れ、渇望を意味しているだけではない。ヘッセは1931年、本作品に関して手紙で次のように書いている。

---

[40] *Die Morgenlandfahrt*, S. 571.
[41] Ebd., S. 578f.
[42] Ebd., S. 583.

私にとって『東方巡礼』は決してかわいらしい戯れとは思われず、完全に信仰告白、それどころか時代の趨勢に対立する趨勢への呼びかけであると思われます。敵は当然、つまり流行を追う人々やジャーナリストたちですが、彼らは私のメールヒェンの中に、人の不幸を喜んで、今日からの「逃避」を見ますが、私のメールヒェンは死を賭けた闘いであり、「逃避」ではありません。[43]

この手紙から、H.H.の脱走後の生活は当時のヨーロッパ社会への批判を含んでいると考えられる。本稿冒頭で述べたヘッセの東南アジア旅行は、『インドからの訪問』(*Besuch aus Indien*, 1922) で彼自身告白しているように、現実のヨーロッパからの逃避であったが[44]、H.H.、いわばヘッセ自身の二度目の東に向かった旅である〈東方〉への巡礼はもはや逃避ではなく、彼がたびたび行ってきた理性や科学技術に支配された現実世界への反抗であると言える。[45]

H.H.は自身の結社への不誠実に関して無罪の判決を受けた後、結社への信仰を試すために、書庫で自分自身に関する情報を裁定するという試練が与えられる。主人公は結社の書庫で自身の名前の書かれた棚の前に立つ。そこには二つだった像が背中合わせに一つになっている像があり、そのうち一方は自身の姿をしており、もう片方はレーオの姿をしていた。H.H.の像は弱々しく、半ば現実味を失っているように見える一方で、レーオの像は色や形の面で力強く見える。そして、内部で動く何かが身を捧げるように H.H.の像からレーオの像へと流入していく。主人公はこの時、かつてモルビオ・インフェリオーレでレーオと交わした会話を思い出す。H.H.が芸術家の創造した人物は芸術家よりも生気に満ちているのはどうしてかとレーオに問うと、彼は母と子の関係と同じであり、母が子どもを生み、全てを子に与えると自身は影が薄くなってしまうと答えたのだった。これを当てはめると、H.H.はヘッセ自身、つまり詩人を意味し、レーオは文学作品を意味していると考えられる。H.H.とレーオの会話から読み取れるような、詩人は作品を育て、また作品に身を尽くす、という見解は、ヘッセ自身の見解を表している。1929 年、ヘッセは手紙の中で自身の行った朗読旅行に触れ、次のように述べる。

朗読するときはいつでも感じるのです。本当に、精神生活や文学に非常な関心を持っていて、詩人が大いに苦心している一時間の間は、少しは感動することのできる人もいるにはいます。しかし今日、こうしたやり方で何か真剣な事柄へと導いてやれるよ

---

[43] *Gesammelte Briefe*, Bd. 2, S. 299, Brief vom 24. 11. 1931 an seinen Neffen Carlo Isenberg.
[44] Hermann Hesse: *Besuch aus Indien*. In: ders.: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Hrsg. von Volker Michels. Bd. 13, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2003, S. 422-426, hier S. 422.
[45] 例えば、メールヒェン『ヨーロッパ人』(*Der Europäer*, 1918) では、理性を自身の才能だと主張するヨーロッパ人が他の人種から「ひょうきん者 (Spaßmacher)」扱いされる。Vgl. Hermann Hesse: *Der Europäer*. In: ders.: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Hrsg. von Volker Michels, Bd. 9, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2002, S. 149-156, hier S. 154.

うな人間はもういません。イエスからゲーテに至るまでのすべての詩人や思想のために、その生活のほんのわずかですら変える人は全くいないのです。これに反して、お金や国家の「名誉」のために数千人という集団で死に赴くということには、直ちに皆が賛成するのに。そういうふうに私は感じるのです。そして美しいジェスチャーのむなしさ、詩人のむなしさがそういう時痛いほど意識されるので、生きているのがもはや耐えられないほどです。〔...〕こうしたことすべてにもかかわらず、詩人として自分の仕事をこなすこと、自分の詩句と文章とを極度の綿密さで築きあげること、〔...〕言語や思想の資質を歳の市の紙幣と区別できる民衆が実際に存在しているかのように振る舞うことが、私の義務〔...〕であることを。[46]

この手紙から、文学作品を読み、感化される読者はもはや存在しないように思われるが、それにもかかわらず作品を作り続けていこうとするヘッセの創作態度が読み取れる。結社の人々が現実世界、理性と科学技術に支配された世界に生きる人々から時折嘲笑されたことから分かるように[47]、ヘッセは当時のヨーロッパの状況および読者と芸術家との距離を感じていた。そのような状況にもかかわらず、彼が文学に従事し続けたのは、H.H.や結社に所属していた人間が現実世界の問題に対処することができたように、空想、すなわち文学によって読者に「醒めた時代（eine nüchterne Zeit）」[48]を乗り越えさせることを詩人の課題だと見なしていたからではないだろうか。彼は本作品を発表したことにより、数多くの当惑や無理解、さらには批判に直面したが[49]、それらの原因は、本作品の雰囲気があまりに時代とかけ離れていることにあったと思われる。また、先述したようにこのメールヒェンの中にヘッセの現実逃避を見出す人もいた。しかし、ヘッセにとって、文学、非現実的なものに従事することこそ社会への関与を意味していたのであり、したがって、詩人として社会に働きかけるには「すっかり引きこもっていることが必要」[50]だったのである。

本章で見てきたように、主人公と結社の関係からは、文学への信念を喪失しそうになりながらも、読者に現実問題を乗り越えさせるため、詩人として文学作品を書き続けていくヘッセの創作態度が読み取れる。しかし、結社に属する人々とそうでない人々の関係に着

---

[46] *Gesammelte Briefe*, Bd. 2, S. 373, Brief vom 21. 12. 1929 an Helene Welti.
[47] Vgl. *Die Morgenlandfahrt*, S. 540.
[48] Ebd., S. 548
[49] 1932 年に姉宛てに書いた手紙に、ヘッセは「ここ〔ヴィンタートゥール〕の読者はいくらか当惑して、『東方巡礼』は素晴らしい、しかしそれ以上の範囲は理解できないと私に断言する」と記している。*Gesammelte Briefe*, Bd. 2, S. 325, Brief von Mitte März 1932an seine Schwester Adele. また、『『東方巡礼（1932 年）について』』では、「私のメールヒェンについて耳にした意見のうち、ただ一つだけ私を唖然とさせ悲しませるものがあった。それは、この作品ややはりそもそも私にとって本当に真剣なものなのかどうか、〔...〕これは単なる愉快な空想劇であって、根本的には読者を軽妙に揶揄するものではないか、と疑って私に尋ねた読者がいたことであった」と書いている。Hermann Hesse: *Zu »Die Morgenlandfahrt«*. In ders.: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Hrsg. von Volker Michels. Bd. 12, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2003, S. 223-225, hier S. 224.
[50] *Gesammelte Briefe*, Bd. 2, S. 489, Brief von 10. 12. 1935 an G. Rutishauser.

目すると、ヘッセはそのようにして読者に働きかけようと試みてはいるものの実際には読者との結び付きを持っていないことを自覚していた様子もうかがえる。結社から見て「信仰心のない人たち」[51]、つまり結社に属さない人間にとっては、結社は嘲りの対象であった。また、H.H.が友人ルーカスに東方巡礼の参加者の一人であったことを話しても、彼は「好意的な皮肉を込めて微笑」[52]するだけであった。このように、結社およびH.H.は結社外の人間と相互理解をすることはない。さらに、結社は芸術や精神に仕える人々から構成されており、そのような人々以外は迎え入れられない。H.H.、結社に属さない人間、結社をそれぞれヘッセ、読者、芸術家とすると、本作品には、ヘッセおよび芸術家と読者との相互無理解が描かれていることになる。

このようなヘッセおよび芸術家と読者の結び付きのなさは、ヘッセの想定する読者と密接な関連を持っている。彼は1933年、手紙で次のように記している。

> 私は詩人というものが与える本来の影響は次のようなものだと考えています。つまり僅かな読者が、その詩人の書いたものをしばらくの間愛読して、やがてはそれを脇にやってしまうのですが、そこから彼らは自分たちの人生や性格を変え、安定させ、解明することを学び取るのです。ところが私の場合、現実には何百人という読者が否定的な批評や、あるいは賛同の手紙を送ってよこし、こんなに一所懸命詳細に私のことを論じたからには、私の方でも感謝の念を表して、幾千もの返事を書かなければならないと思っているのです。[53]

ヘッセは「僅かな」読者が自身の作品から良い影響を受けることを期待している。また、彼は同年、「私は自分の本がますます群衆へ普及することと、「成功すること」を避けるよう努めています。〔...〕例えば『東方巡礼』が全く少数の者のためにあること、群衆に対して完全に閉ざされていること、そしてそれゆえ私に何ももたらさないことは金や金儲け、そして生の機械化に対する私の立場を表現する企みの一つなのです」[54]と述べている。この文章から、ヘッセは自ら読者の選別をし、一般読者を自身の読者像から除外するようになったことがうかがえる。したがって、ヘッセは創作活動によって読者に働きかけようとしたが、その試みは、ある限られた読者にしか向けられていなかったと考えられる。その一部の読者とは、結社への立ち入りが許されるような人、つまり内面世界を信じ芸術に仕える人であると言える。ヘッセは読者に現実の諸問題を乗り越えさせることを詩人の課題と見なし『東方巡礼』を執筆したと考えられるが、実際彼が行ったのは、少数の精神的同行者を困難な時代から保護し、彼の理想とする共同体の創設に努めたことであると言えるのではないだろうか。その共同体は『東方巡礼』においては〈結社〉と呼ばれるが、『ガラス

[51] *Die Morgenlandfahrt*, S. 540.
[52] Ebd., S. 559.
[53] *Gesammelte Briefe*, Bd. 2, S. 364, Brief vom Ende Januar, 1933 an Holst Schwarze.
[54] Ebd., S. 404, Brief vom Ende Oktober, 1933 an Hans Popp.

玉演戯』(*Das Glasperlenspiel*, 1943) において〈カスターリエン〉という名が与えられ、更に発展的に描かれることになる。

おわりに

本論では、まずは『東方巡礼』における〈東方〉についてヘッセ自身の東南アジア旅行体験、他の東洋観、老子の思想およびインド思想との関連を検討した後で、主人公の歩みを追いながら作品を考察した。その結果、本作品の〈東方〉には作者自身の中で内面化された東南アジアが、そして結社の人々には信仰に基づいて暮らす東南アジアの人々が反映されていることが明らかになった。また、その〈東方〉は、テクスチュアルな東洋と融合し、故郷や、人間の内面にある創造的な部分を意味するヘッセ独自の〈東方〉が形成され、その世界の根底には老子の思想とインド思想から得た「統一」の精神があることが分かった。そして、主人公が結社に入り、一旦は結社から脱走するものの、再び結社に受け入れられるという筋書きに、ヘッセが詩人として読者に働きかけようとしているものの、大多数の読者との決定的な距離が存在することが分かった。

〈東方〉という故郷は、ヘッセ自身の理想をもとに創り出された場所であり、人間の内部にある創造的な部分をも意味している。芸術家から構成される共同体は、自身の作品を創り出すことによって、読者にそのような故郷へと導こうと試みる。しかし、ヘッセの創造した故郷は、そもそも非西洋的、非現実的要素から成り立っており、現実のヨーロッパの読者の側から見ると、そこは異郷として見える可能性もある。『東方巡礼』を読んで当惑を示した読者がいたことはそのことを裏付けているだろう。ヘッセはあくまでも自身の視点から現実の社会が抱えている問題を考えており、その上、実際には少数の読者しか視野に入れていなかった。したがって、彼の故郷へと戻ろうとする試みは、大部分の読者のもとで異郷へと行こうとする試みに転じてしまう。ヘッセの故郷は、限られた者にのみ開かれており、その他の大勢の人々にとっては未知の場所と映り、立ち入りを許可されていなかったのである。